

将軍、三職・七頭守護家の行末は？

室田時代

宗全・勝元没後の応仁の乱と、
乱後の争乱「両畠山家抗争」
「山城国一揆」「明応の政変」
「永正の錯乱」「両細川の乱」
「享祿・天文の乱」等を追う



年表帖

下

卷

略系図 13 伊予国守護河野氏、14 大和国人衆徒 筒井氏惣領家、
15 大和国人国民 越智氏惣領家、16 大和国人衆徒 古市氏、
17 大和国人国民 十市氏、18 大和国人国民 箸尾氏

近畿府県城跡位置図 山城・丹波・丹後(京都府)、河内・和泉(大阪府)、
大和(奈良県)、摂津・丹波・丹後・播磨・淡路(兵庫県)

文明5年(1473)12月の9代将軍足利義尚の「将軍宣下」にはじまり、
「応仁・文明の乱」収束を経て、天文5年(1536)の細川晴元の上
洛までを時系列で記しました。

目次

はじめに～この本の使い方～	2
目次年表	3～20
近畿府県城跡位置図	21～24
各家略系図	25～28
室町時代年表帖(下巻)	29～221
主要参考図書	222
あとがき、奥付	224

はじめに～この本の使い方～

この下巻は、文明5年(1473)12月、9代足利義尚の將軍宣下から、天文5年(1536)の「細川晴元は畿内に進出後7年を経てようやく京に本拠を定め、政権の運営を開始する」までの年表で、日付までを記載しています。一部不明な月・日付に関しては、「一」で割愛をさせて頂いたり、「この月」などと、表記しておりますのでご了承下さい。

特に重要と思われる事項(歴史的流れのために必要と思われる事件等)などは、太字等で記載しております。

～太陰暦・太陽暦について～

本書での月日の表記は全て和暦を採用しており、一部、西暦の表記とはズレが生じています。

日本では、明治5年12月3日(=明治6年1月1日(西暦1872年1月1日))までは太陰暦(旧暦・天保暦)を、それ以降は太陽暦(新暦・グレゴリウス暦)を使用しています。

そのため、太陰暦である和暦(旧暦・天保暦)の日日と、それに対応する太陽暦である西暦(新暦・グレゴリウス暦)の日日は一致しません。ご注意下さい。

なお、太陰暦(太陰太陽暦)の1年は太陽暦の1年に比べて約11日短く、このズレは3年で約1ヶ月分(約33日)となります。

このため約3年に1度、余分な1ヶ月(閏月)を挿入して1年を13ヶ月とした閏年を設けることで、ズレを解消しています。

なお、閏月は閏〇月と表記し、仮に閏4月があった場合、これは通常の4月の後に閏月(閏4月)が挿入されていることを示しています。

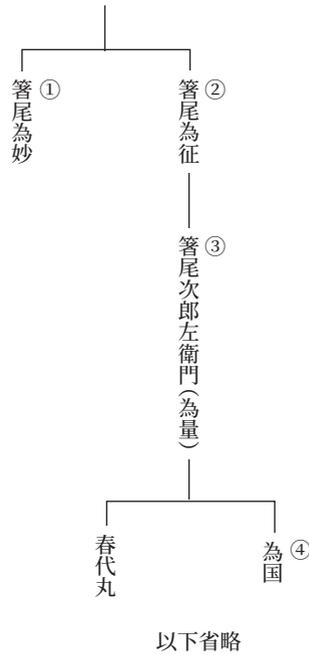
例)「西幕府が解散一応仁・文明の乱が終わる」.:文明9年11月11日(西暦:1477年12月20日)

西暦 和暦	月日	出来事	No.
文明5 (1473)	12月19日	「 義尚、將軍宣下 」。足利義尚9歳、元服して第9代征夷大將軍に就任し、あわせて正五位下左中將となる。「義尚」と改名という。	2474
文明6 (1474)	4月3日	「御霊社合戦以来八か年におよぶ大乱は一応の終結をみた」ともいう。	2488
文明6 (1474)	6月26日	山名政豊ら西軍であった諸将が、新將軍義尚に出仕し対面。	2505
文明6 (1474)	7月1日	「 戦いが再燃する 」。「東軍が、二条大宮・猪熊・堀川等に放火する」。	2506
文明6 (1474)	10月14日	「 加賀富樫家の内紛一加賀一向一揆、蜂起して守護家の内紛に介入 」。「加賀一向一揆が蜂起し、富樫幸千代の蓮台寺を攻略」。	2533
文明6 (1474)	11月13日	前將軍足利義政、この日に改めて大内政弘を(東軍による)左京大夫に任じ、懐柔に乗り出す。	2536
文明7 (1475)	1月1日	応仁・文明の乱の勃発以降途絶えていた朝廷儀式が再開される 。	2539
文明7 (1475)	5月2日	「大和に東西に分かれた戦端が再び開かれた」。	2556
文明7 (1475)	8月6日	「六角氏討伐」。近江では西軍六角行高(高頼)に山門領を押領された延暦寺の衆徒が、幕府に六角氏追討を願い出た。	2567
文明7 (1475)	9月一	「京極騒乱一六角氏討伐」。出雲へ落ち延びていた京極政経と多賀高忠は、この月に出雲の国人衆を率いて上洛し、東軍であった政経は幕府から近江守護に補任され、六角氏から近江奪還の命令も受ける。	2576
文明7 (1475)	11月一	「 六角氏討伐 」。西軍の六角行高(高頼)は援軍を得て反撃、幕府軍を破る。	2583
文明7 (1475)	11月18日	「 守護代織田家の内紛はじまる 」。斯波義廉は、織田伊勢守家(岩倉織田氏)の織田敏広(西軍)に擁立されて、この日京を発ち、尾張へ入国。東軍に属する分家の織田大和守家当主の織田敏定を破る。	2586
文明7 (1475)	12月3日	「 朝倉孝景、越前統一 」。朝倉孝景、対抗して越前大野の土橋城に籠もる斯波義敏軍を総攻撃。	2588
文明7 (1475)	12月一	「 応仁・文明の乱一義視、義政に恭順 」。西軍公方足利義視が、義政に恭順を誓い、義政も義視の罪を不問に付すと返答。	2591
文明8 (1476)	1月6日	「乱後初の「叙位儀」が行われる」。	2594
文明8 (1476)	2月19日	「 今川氏の内紛はじまる 」。今川義忠の死んで、義忠の嫡男である龍王丸(後の今川氏親)が幼少だった。	2597
文明8 (1476)	5月16日	日野勝光、左大臣に昇進。	2610
文明8 (1476)	6月15日	「 日野勝光病没一富子が実質的な幕府の指導者となる 」。	2616
文明8 (1476)	9月14日	「 応仁・文明の乱一足利義政、大内政弘に命じ、東西両軍の和平を計らせる 」。	2627

西暦 和暦	月日	出来事	No.
文明8 (1476)	12月20日	「応仁・文明の乱一義視、義政と講和を図る」。	2633
文明9 (1477)	5月3日	足利義視、日野富子へ、大内政弘を通して和睦の仲介料三千疋を支払う。	2654
文明9 (1477)	9月21日	畠山義就、長期にわたり占領していた山城を退去、畠山政長討伐のため、領国である河内へ帰国する。	2665
文明9 (1477)	9月26日	「御構の東幕府は、約10年ぶりに解放される」。	2669
文明9 (1477)	10月13日	「義就は大和の事実上の支配者となる一筒井党、東山中に逃れる」。	2681
文明9 (1477)	11月3日	9代将軍足利義尚の名で周防・長門・豊前・筑前の四か国の守護職を安堵された大内政弘が、東幕府に正式に降参する。	2685
文明9 (1477)	11月11日	「 西幕府が解散一応仁・文明の乱が終わる 」。「西軍将士土岐・大内等、第宅を自焼し各々帰国する」。	2688
文明9 (1477)	12月25日	畠山政長、三度目の管領に就任 。22代とされ、最後の常設管領となる。	2699
文明10 (1478)	1月4日	「享徳の乱一古河公方と両上杉氏との間で和睦が成立」。	2702
文明10 (1478)	7月10日	義政、美濃川手城の義視と講和。義政、義視の嫡男義材(のちの義植)を養子に迎え10代将軍に指名する。	2725
文明10 (1478)	7月一	細川聡明丸12歳、元服し8代将軍・足利義政の偏諱を受けて「政元」と名乗る 。	2728
文明10 (1478)	10月9日	「畠山義就は、大和に続いて河内をほぼ手中に収める」。	2743
文明10 (1478)	10月12日	「守護代織田家の内紛」。尾張国の合戦に勝利したとの織田敏定の報告が、幕府に到来する。十八日、尾張国平定の報告が到来する。	2745
文明10 (1478)	一	「六角氏のお家騒動」。六角行高(高頼)は、応仁の乱終結後のこの年、幕府から近江守護に補任される。	2762
文明11 (1479)	1月19日	「 守護代織田家の内紛一旦和睦 」。再三の幕府の介入により、織田敏広と美濃の齋藤妙椿は清洲城の包囲を解き、織田敏定と織田敏広両軍は尾張を分割統治することで和睦する。	2765
文明11 (1479)	3月16日	「幕府、公家諸将を旧第址に帰らせる」。	2775
文明11 (1479)	4月26日	「土御門内裏修造事始めが行なわれる」。	2780
文明11 (1479)	10月2日	「 畠山義就の河内新邸成り移住する 」。高屋城は、以後義就とその子孫の河内支配の拠点となる。	2803
文明11 (1479)	10月一	「朝倉孝景、斯波義良(後の義寛)・甲斐勢らとの合戦のため、京都から越前への通路を閉鎖」。	2806

西暦 和暦	月日	出来事	No.
文明11 (1479)	11月22日	将軍足利義尚判始。しかし、父・義政が依然として政務をとった。	2808A
文明11 (1479)	12月3日	「 細川政元監禁事件 」。政元14歳は、野遊の中そのまま掠奪されてしまった。	2809
文明11 (1479)	12月7日	「(後土御門)天皇、日野政資第より土御門内裏に還幸」。	2811
文明11 (1479)	12月21日	「 今川氏の内紛一応決着 」。室町幕府の意向を受けて駿河に下った幕臣伊勢盛時(北条早雲)の尽力で、この日、前将軍・足利義政の名による龍王丸(今川氏親)の家督継承と本領を安堵する御教書が出された。	2815
文明12 (1480)	2月12日	日野富子は内裏修理という名目で京都の七口に新しい関所を設けて通行税を徴収しながら、幕府の赤字財政の穴埋めに流用し、富子個人も「上前を撥ねた」というので、徳政一揆が蜂起して京都や奈良を荒らし廻り、奈良では興福寺の十三重塔も放火のため焼失してしまう。	2823
文明12 (1480)	3月26日	「政元監禁事件」終わる。九郎(政元)は無事帰洛をした。	2831
文明12 (1480)	5月一	9代将軍足利義尚、本鳥を切る 。これは依然として政務を執り続ける父義政への抗議であった。義尚はなだめられた。	2837
文明12 (1480)	8月一	「美濃文明の乱」はじまる。	2846
文明12 (1480)	11月一	「 美濃文明の乱 」終わる。齋藤利国(妙純)、異母兄の美濃守護代齋藤利藤の拠点墨俣城を攻め破る。	2857
文明13 (1481)	3月3日	「守護代織田家の内紛再燃」。	2865
文明13 (1481)	6月5日	「(第5期)幕府室町第作事の事始め」。	2872
文明13 (1481)	7月23日	「守護代織田家の内紛再燃」再度一旦終わる。	2877
文明13 (1481)	9月15日	「 斯波氏・甲斐氏らの最後の決戦は、朝倉氏の勝利に終わる 」。	2885
文明14 (1482)	6月20日	(大和)幕府が興福寺に対して畠山義就の討伐令を下すと、月末には、義就方であった鷹山奥(高山)頼栄・頼秀父子に続いて片岡氏が帰順する。	2904
文明14 (1482)	7月一	「 義政、政務を退隠表明 」。義政、正式に9代将軍足利義尚に政務を譲る。しかし、義政は幕府最高権力者の地位は維持し、子義尚の権力を制約し続ける。	2905
文明14 (1482)	閏7月19日	「 両畠山抗争の再開 」。「畠山政長は尼崎から船で和泉の石津に渡った。一三〇余騎であったという。政長はついで八月には堺、平野を経て、八尾の西に布陣し、若江城の奪回を目指した」。	2916
文明14 (1482)	11月27日	「享徳の乱」終結。「成氏と両上杉家との間で和睦「都鄙合体」により、室町幕府と、戦いに飽きた二人、足利義政と古河公方足利成氏と和睦」。	2936

18 大和国人国民 箸尾氏略系図 ○数字は家督継承代数



*各家家督継承等は年表帖からある程度追えたが、箸尾氏は追えていないので、推測となります。ご容赦ください。

西暦1473

文明5	8月8日	「越前榎山外の戦い」。「七月十日比より甲斐人勢を率いて細川呂宜郷等に出張、八月八日大合戦」(『大乘院寺社雑事記』八月十五日条)。「文明五年癸巳八月八日光塚・蓮浦合戦、榎野隼人討死之事、」(甲斐・朝倉両勢、坂井郡光塚・蓮浦で合戦)(『当国御陳之次第』)。東軍の巨頭細川勝元が死去すると、越前を放逐された甲斐勢は7月に大規模な反撃を開始した。この日、東軍の朝倉孝景(1428~1481)、越前榎山(福井県あわら市榎山)で甲斐方を破る。	2452
	8月10日	西軍畠山義就方の遊佐五郎(就家)、河内八ヶ所に攻め入り放火する。	2453
	8月16日	「足利義尚の元服要脚を洛中の土倉・酒屋に平均に課す」(『蜷川家古文書』)。	2454
	8月26日	足利義視が大内政弘の館に入る。	2455
	8月27日	元大乘院門跡・経覚(1395~1473)、27年間過ごした古市郷にある迎福寺で没。79歳。	2456
	8月28日	「右馬頭ハ可為宗明代之由、自先日被定云々」(『親長卿記』)。 8歳で水干姿の聡明丸、幕府出仕始。実子の聡明丸(のちの細川政元)(1466~1507)が、典厩家2代当主細川政国(1428~1495)ら分家の後見の下で家督を継ぎ、丹波・摂津・土佐守護に就任する。	2457
	6月19日	伯耆守護山名之弘(山名教之の3男)(?~?)、伯耆下向に先立って近江坂本に滞在、11月21日には伯耆・円福寺等の諸役を免除、禁制を掲げた。教之三男之弘は、伯耆守護として美作における赤松政則の旧領回復を防ぐ立場にいたが、之弘自身は赤松氏ら東軍の影響を強く受けており、山名家中からは正統な家督とは認められなかった。そのため、之弘の在職はわずか3年程で終わり、弟の元之(?~?)に守護職を譲ったとされる。	2458
	10月1日	「越前に甲斐八郎(敏光)の軍勢が打ち入り、坂井郡河口荘・坪江郷を焼き払う」(『大乘院寺社雑事記』)。	2459
	10月8日	「賀茂郷民、幕府設置諸関の撤廃を請う」(『親長卿記』)。	2460
	10月11日	美濃の齋藤妙椿(1411~1480)、將軍足利義政の美濃国討伐を命じた文書伝達に赴く使節を、同守護土岐成頼配下の遠山氏らが途中の三河国で捕らえ文書を奪ったと、興福寺大乘院尋尊に伝える。	2461
	10月22日	避難生活中の後土御門天皇(1442~1500)が、義政正室の日野富子に仕えた後、親王時代の後土御門天皇の寵愛を受けて宮中に上った花山院兼子(1448~1513)との間に皇女を出産。二人の間には4人の男子と二人の女子が生まれたという。文明3年(1471)頃には、日野富子(1440~1496)と室町亭に避難していた後土御門天皇との密通の噂が広まった。そんな噂が流れるほど義政と富子の間は冷却化していた。	2462
	10月23日	「(畠山)義就、淀に出兵する」(『東寺執行日記』)。	2463
	11月4日	筒井順永(1419~1476)が河内に出兵し、西軍方と野崎(大阪府大東市野崎)で戦う。	2464
	11月7日	「幕府、小早川元平に命じ、敵与同の一族らを成敗し、領内に陣取る近国の兵を退散させる」(『小早川家証文』)。小早川敬平(別号元平)(1452~1499)は、安芸国の沼田小早川氏の当主。	2465
	11月12日	「京極騒乱」。京極政光(持清の次男)(1450~1473)が没。文明4年(1472)に京極政経派を撃破、政経(持清の三男)(1453~1502/1508)らを追放して乙童子丸(高濑)(持清の孫)(1460~1538)を当主に据えて多賀清直(?~1479)と共に後見人となったが、この日に没した。	2466

西暦1473

文明5	11月21日	「是より先、小笠原家長(?~1480)、子定基(?~1511)及び小笠原一族と共に美濃大井・荻嶋両城を攻めて之を陥る、是日、將軍足利義政、小笠原家長並に一族の戦功を褒す、尋で、また明日、家長の戦功を褒す、 將軍足利義政、小笠原政秀 (?~1493)を信濃守護に補す、 」。	2467
	11月22日	「 河野氏の内紛 。」「 足利義政、河野通直を伊予国守護職に補する 」(『明照寺文書』)。 細川勝元が亡くなった後、河野通直(教通) (?~1499)は、東軍より伊予守護に任命された。通直(教通)は、文明2年(1470)頃を境に東軍方に属したようである。	2468
	11月24日	足利義政、今川義忠(1436~1476)に遠江懸河荘代官職を宛行う。	2469
	11月24日	「享徳の乱一五十子の戦い」。古河公方足利成氏(1434?~1497)が五十子(埼玉県本庄市五十子)の上杉陣を急襲し、扇谷上杉政真(1451~1473)が討死。享年23歳。	2470
	12月7日	「尼崎及び大物城の戦い」。主戦派大内政弘方の相社弘康、細川四郎と薬師寺長盛(元長の弟)が守る尼崎城(兵庫県尼崎市北城内)及び大物城(兵庫県尼崎市大物町2丁目(大物主神社))を攻め落とす。	2471
	12月11日	この頃から義政(1436~1490)と富子(1440~1496)の間は急速に冷たくなっていく。子の義尚もまた父に懐かない。妻子から見捨てられ、多くの武将からも疎んぜられた義政は、失意と孤独の中でますます自虐的・内向的になってゆく。	2472
	12月17日	「足利義尚、征夷大將軍となる」(『親長卿記』)。	2473
	12月19日	「 義尚、將軍宣下 」。足利義尚9歳(1465~1489)、元服して第9代征夷大將軍に就任し、あわせて正五位下左中將となる。「義尚」と改名という。加冠の義政が義尚に將軍職を譲って隠居。 畠山政長(1442~1493)は、義尚の元服式のため1週間、2度目の管領を務めた。この時期管領に権力はほとんどなく、細川勝元の死去から政長の管領就任まで半年余り空席であった。富子兄の公家日野勝光(1429~1476)が「新將軍代」となり、義尚が15歳になるまで御判は前將軍・義政が、その他の政務は勝光が行うことになる。勝光は御前沙汰に参加して、政所執事の伊勢貞宗(1444~1509)の補佐を受けて奉行衆の指揮をしたり、協議の内容を義政に報告して了承を得たりしたりと、管領の職務を担ったものの、政所の職務に関与する権限や幕府文書を発給する権限はなかったという。	2474
	12月25日	「將軍足利義尚、父義政と共に始めて参内す、小笠原長朝等、之に供奉す、」。 小笠原長朝(府中小笠原家)(1443~1501)は、義尚將軍就任後初の参内に供奉し、花の御所で犬追物を興行した際に奉行を務めた。	2475
	—	「 足利義尚・日野富子が新造御所に移る。新造御所御門立柱上棟 」。	2475A

西暦1474

文明6	1月11日	大内政弘(1446~1495)、山城の寺社領返還 。	2476
	1月18日	「(越前) 柚山の戦い」。文明六年甲午正月十八日柚山合戦、同五月十六日二殿下桶田口合戦、同閏五月敦賀天神ノ浜合戦、同十五日波着寺・岡俣合戦、千福中務殿・増沢・甲斐法華院等討死」(『当国御陳(陣)之次第』)。 朝倉孝景(1428~1481)、越前にて甲斐八郎(敏光)の柚山城(福井県南条郡南越前町)攻略。孝景は東軍につき、一乗谷を本拠として甲斐一党と戦い、柚山城に立て籠もった甲斐勢を掃討し、また5月以降には殿下・桶田口から岡保・波着山まで深く侵攻した千福氏や甲斐氏を討ち取る。	2477

西暦1474

文明6	1月26日	「足利義視、小早川弘景に同熙平の一跡を宛行う」(『小早川文書』)。 沼田小早川氏当主の小早川熙平(1416~1473)が死去すると、西軍大将足利義視は、熙平の所領を小早川弘景(竹原小早川氏11代当主)に与える御内書を発した。弘景は、これを口実に安芸・備後国境付近の西軍の主力として、沼田小早川氏の本拠である高山城(広島県三原市本郷町)を攻撃する。	2478
	2月16日	「僧宗純(一休)、大徳寺の住持になる」(『酬恩庵文書』)。一休宗純(1394~1481)、大徳寺住持となる。	2479
	2月—	細川・山名両家の後継者同士で和睦交渉が進められる。東軍では赤松正則、西軍では畠山義就が反対する。	2480
	3月3日	「 足利義政、義尚に室町第を譲り、今出川の小川御所に移る 」(『言国卿記』)。 義政は政治への興味を失う 。 『言国卿記』は、室町時代の公家、山科言国(1452~1503)の記した日記。 足利義政は小河(小川)に建設した新邸に移り、室町第には富子と將軍義尚が残る。興福寺別当尋尊は「天下公事修り、女中御計(天下の政治は全て女子である富子が計らい)、公方(義政)は大御酒、諸大名は犬笠懸、天下泰平の時の如くなり」と評している。幕府では日野富子の勢力が拡大していた。	2481
	3月28日	「足利義尚が参内する」。同月29日も。	2483
	3月29日	「西軍の山城守護畠山義就、風呂銭を東寺坊舎に課す」(『東寺執行日記』)。 「入浴」は、浴槽の湯に浸かる今の温湯浴(江戸時代後期頃から主流)とは異なり、蒸気浴(現在でいうサウナ)が中心。入浴方法は、蒸気の満ちた湯屋内で浴衣を着て汗や汚れを浮き出させた後、湯で身体を流して手拭いで拭く、というものだった。ちなみに、入浴中、腰の下に敷いた布が「風呂敷」の語源となっている。	2484
	3月—	「東軍の安富氏配下の野田泰忠、軍忠を注進し、細川政国(典厩家2代)(1428~1495)の確認を得る」(『編年雑纂所収文書』)。	2485
	4月2日	「(足利)義視、備後・安芸両国の国衆に、(沼田小早川氏の居城)高山城(広島県三原市本郷町)攻めの合力を命じる」(『小早川家証文』)。	2486
	4月3日	「山名政豊、細川聡明丸(のちの細川政元)との間に和議(停戦協定)成り応仁・文明の乱止む。畠山義就らは参加せず。両雄相争い京中民家・寺社悉く灰燼になり、人民飢寒に苦しめり。勝負決せず、徒党洛中に対陣、朝廷衰える」(『応仁記』)。 「堀に橋を架ける。東西両軍の主将山名政豊・細川政元、講和を決める」(『親長卿記』)。	2487
		細川・山名両家を隔てる空堀には橋が架けられて、東陣から山名の陣を通過して北野の天満宮に参詣に行く者や、山名方の占領下にあった下京から東陣へ物売りにくる商人などが自由に往来し始めた。山名・細川両家の新しい惣領山名政豊(宗全の子または孫)(1441~1499)・細川聡明丸(のちの細川政元)(1466~1507)の間で単独講和が結ばれた。仲介役を務めたのは若狭国・丹後国守護、安芸国分郡守護の武田国信(1437~1490)であった。しかしこの時の和睦の条件の1つとして、武田氏が応仁の乱の最中に一色義直(1430?~1502?)と戦って奪った丹後の所領を返還せよという条件があった。	

西暦1474

文明6	4月3日	「御霊合戦以来八か年におよぶ大乱は一応の終結をみた」ともいう。 「東西大名可有和与之由、及其沙汰云々、於東方者、細川(政元)、同讃州(成之)等・武田(国信)以下可然旨連署、赤松(政則)不同心云々、前管領畠山尾張守(政長)可然之由申云々、於西方者、山名(政豊)、土岐(成頼)、斯波(義廉)、大内(政弘)各和与事可然云々、如此之間、大略無為無事也、隨而自他不及合戦…」(『大乘院尋尊僧正記』)。 東軍・西軍の全体の和睦を交渉していたのだが、東軍では細川一族と武田国信(1437~1490)らが連署、畠山政長(1442~1493)も承知だが、赤松政則(1455~1496)は不同意、西軍では山名政豊(1441~1499)、土岐成頼(1442~1497)、斯波義廉(1445?~?)、大内政弘(1446~1495)が同意した。さらに一色義直(1430?~1502?)も同意したようだ。しかし、畠山義就(1437?~1491)、畠山義統(?~1497)などの出席は無かったようである。だが、必ずしも東西軍双方が納得したためではなく、不平組もまた多く存在した。中央での和平は各地で戦っている者にとって寝耳に水であり、大きな犠牲を払って戦う前線では納得できなかったらしい。 派閥の領袖にも、将軍義尚にも、停戦を実現する力がなかった。そして、和睦反対派の東西諸将の小競り合いはなお続く。	2488
	4月15日	「一色義直、船岡山の菅を徹す」(『大乘院寺社雑事記』)。	2489
	4月15日	山名政豊、8歳長男(常豊)(1466~1486)を連れ、将軍足利義尚(1465~1489)に拝謁、東幕府への帰参が認められる。	2490
	4月23日	「山名政豊の部兵、畠山義就の部兵と室町に戦う」(『東寺執行日記』)。 山名政豊軍と畠山義就軍の足軽同士が小規模な合戦を交える。 山名政豊(宗全の子とも孫ともいう)は、東軍に属して西軍と戦い始める。御構外の山名政豊占拠の堀川以西が東軍支配下となり、人・物の往来は緩和された。	2491
	5月1日	和泉上半国守護家の細川頼次(細川持有的の子)、前将軍足利義政より偏諱を受け「政有」(1449~1481)と名乗る。	2492
	5月16日	「(越前)大畔繩手の決戦(岡保・波着寺の戦い)(福井市河増・殿下・岡保地区)(5月16日~閏5月15日)」。 柚山の戦いで敗れた甲斐敏光らは、坂井郡や甲斐に逃れた牢人と合流し、北部からまたまた侵攻開始、九頭竜川を越えて、朝倉軍を攻め込む。この月には殿下・桶田(福井市河増町)、続いて翌閏5月には、西軍方の富樫幸千代(成春の次男)らと連携してそこから2Kmほど南東の朝倉街道をはさんだ波着山の麓一帯で激戦、朝倉孝景は侵入を阻止する。	2493
	閏5月一	細川聡明丸(のちの細川政元)と山名政豊の間で和議が成立すると、 一色義春は、東幕府への帰参が許され、本国丹後領有が認められる。 一色義直(1430?~1502?)は東軍に帰順・隠退し、嫡男一色義春9歳(1466~1484)を幕府に出仕させた。	2494
	閏5月5日	西軍畠山義就(1437?~1491)、日野勝光(1429~1476)を通じ、東軍との講和と京への帰参を図る。勝光が義就から二千百貫文の礼銭を受けて講和の斡旋をしているといわれた。	2495
	閏5月5日	「敦賀天神浜の浜合戦」。朝倉氏の敦賀郡平定は未だ流動的であった。	2496
	閏5月7日	今出川殿(足利義視)、一色知行の分国各忠によって拝領の沙汰出来ず。三河は讃州(細川持常)拝領、伊勢と丹後は一色五郎義春に給う、次に若狭は武田(国信)に拝領と云々。足利義政は、伊勢半国を一色義春に返付するように国司北畠政郷に命じたが容易に渡さなかった。	2497

西暦1474

文明6	閏5月15日	「一色義直の嫡子義春に丹後守護職が返付されたため、これに抵抗する武田・細川家臣と一色勢との間で合戦となる」(『大乘院寺社雑事記』)。 東軍武田国信(1437~1490)・細川政国(典厩家2代)(1428~1495)勢が丹後をほぼ制圧していた。丹後の一色勢は同国に駐屯していた武田勢を破り、旧領回復に成功するとされる。和睦に参加した武田国信は、援軍を丹後に送ることができなかった。	2498
	閏5月15日	「(越前)波着寺・岡保合戦」。東軍朝倉孝景は、西軍方であった富樫幸千代(成春の次男)らと連携してそこから2Kmほど南東の朝倉街道をはさんだ波着山の麓一帯で甲斐方と激戦、侵入を阻止する。	2499
	6月1日	(大和)大和国内各所で争いが起きる。雀城と山田、秋篠と和田・山城山田、豊田と法貴寺、十市と楊本・福智堂・豊田、布施と越智、檜原と室など。	2500
	6月4日	「幕府の「犬追物興行」に安富新兵衛尉元家・奈良修理亮元安・香川中務丞元景らが射手として参加した」(『犬追物日記』)。三人は讃岐国人で細川京兆家の家臣。	2501
	6月10日	将軍足利義尚(1465~1489)、従四位下に昇叙。	2502
	6月10日	「美濃国の齋藤妙椿が越前に至り、朝倉氏と甲斐氏の和解を図る」(『大乘院寺社雑事記』)。 美濃を牛耳る齋藤妙椿、数千騎を率いて越前へ赴き、東軍に寝返っていた朝倉孝景(1428~1481)と、西軍斯波義廉の重臣甲斐八郎(敏光)(?~?)を和解させる。利藤後見役の齋藤妙椿(1411~1480)は、守護代で甥の利藤(?~1498)を乗り越える実権を握っていた。	2503
	6月23日	「上京中御門方で、西軍の足軽、同じ西軍の大内政弘の兵と合戦する」(『東寺執行日記』)。	2504
	6月26日	山名政豊(山名宗全の子とも孫とも)(1441~1499)ら西軍であった諸将が、新将軍義尚(1465~1489)に出仕し対面。西軍は義尚の叔父・義視を将軍後継に推していたがその方針転換を名実ともに天下に示す。西軍主力の大内政弘や畠山義就・土岐成頼らが反発する。	2505
	7月1日	「戦いが再燃する」。「東軍が、二条大宮・猪熊・堀川等に放火する」(『東寺執行日記』)。東軍となった山名政豊勢が、二条大宮、岩神社、猪熊・堀川の在家3、4町分を放火する。	2506
	7月2日	「(東軍)畠山政長勢、三条坊門、猪熊、堀川、油小路を放火する」。	2507
	7月6日	東軍の但馬・備後守護を確保した山名政豊、(東軍の)山城守護に任じられる。	2508
	7月7日	「大内政弘、六角油小路に陣し、(畠山)義就、二条・三条を扼す」(『東寺執行日記』)。 西軍大内政弘が四条坊門大宮の本能寺より猪熊、堀川、油小路通りに陣取る。同じく西軍の畠山義就が大宮二条から三条にかけて陣取る。扼すは、おさえる。	2509
	7月12日	「西軍が足軽を出し三条坊門、油小路西面を放火する。東軍は土岐成頼の館等を放火する」。 河野通直(教通)方と思われる中川氏をはじめとする勢力が在京し、西軍方の土岐成頼の邸宅を攻め落としたという。	2510
	7月13日	「東軍、下京土岐第、妙行寺、法華堂等に放火する」(『親長卿記』)。東軍は土岐成頼の館等を放火する。	2511
	7月18日	「大和国人古市・越智等、大内政弘の募に応じて入京する」(『大乘院寺社雑事記』)。	2512
	7月26日	「室町殿より山名政豊・細川政元に「五劔」が下された」(『言国卿記』)。	2513

あとがき

本書(下巻)は、文明5年(1473)12月の9代將軍足利義尚の「將軍宣下」にはじまり、文明9年11月、11年に及ぶ「応仁・文明の乱」収束を経て、天文5年(1536)の細川晴元の上洛までを時系列で記しました。

その間にはサブタイトル以外に「加賀一向一揆」、「朝倉孝景、越前統一」、「応仁・文明の乱後」、「畠山政長、三度管領になる」、「畠山義就の河内新邸成り移住する」、「細川政元監禁事件」、「9代將軍足利義尚、本鳥を切る」、「両畠山抗争の再開」、「義政が浄土寺山荘(のちの銀閣寺)に移り住む」、「第一次長享・延徳の乱(六角征伐)」、「(関東)長享の乱」、「門徒持ち」の国が成立」、「將軍義尚、没」、「足利義政、没」、「足利義材(義植)、第10代征夷大將軍になる」、「(畠山)義就追討の幕府奉書」、「足利義視、没」、「第二次長享・延徳の乱(第二次六角征伐)」、「義材(義植)の河内出陣」、「畠山政長自刃」、「義材(義植)が越中国に奔り放生津幕府成立」、「管領細川政元が主導する政権が誕生」、「日野富子、没」、「細川京兆家、三人の養子となる」、「薬師寺元一の反乱—第一次淀古城の戦い、將軍義澄が出奔して「前將軍義尹(義植)が再任される」、「細川高国が管領の任ぜられる」、「細川澄元、没」、「義植、高国と対立し、淡路国に走る」、「高国、足利義晴を迎える」、「八上・神尾山城の戦い」、「高国政権崩壊」、「堺幕府成立」、「高国と細川晴元の和が破れる」、「大物崩れ—高国自害」、「顕本寺の戦い—堺公方府崩壊」、「晴元と將軍義晴の和睦成る」等を年表に記載しました。

上巻・下巻には日本の全体図や都中心の近畿の地図や、各家の家督継承の略系図を掲載しております。参照いただいて、戦いの位置関係や、争乱と下剋上の武士たちの関係理解の一助となれば幸いです。

編集にあたり、「下巻」掲載の主要参考図書や国立国会図書館デジタルコレクション、東京大学デジタルコレクション、国の公式WEB、各自治体・各大学・各団体WEB等、大いに活用させていただきました。しかし、資料による違い、異説、物語などあらゆる事項があり、すべては、弊社の編集責で掲載しております。

最後になりましたが、ご協力いただきましたスタッフの皆様様に、厚く御礼申し上げます。

宗全・勝元没後の応仁の乱と、乱後の争乱「両畠山家抗争」「山城国一揆」
「明応の政変」「永正の錯乱」「両細川の乱」「享禄・天文の乱」等を追う

室町時代年表帖 下巻(全2巻)

第1版第1刷

発行日 2025年7月1日

デザイン 岩崎宏

編集・制作補助 ユニプラン編集部
橋本豪

発行人 橋本良郎

発行所 株式会社ユニプラン <http://www.uni-plan.co.jp>
(E-mail) info@uni-plan.co.jp

〒601-8213 京都市南区久世中久世町1丁目76

TEL(075)934-0003 FAX(075)934-9990

振替口座/01030-3-23387

印刷所 株式会社ファインワークス

定価はカバーに表示してあります。

ISBN978-4-89704-628-0 C0021